

「米国の大統領選挙」

2016年11月16日

米国の次期大統領選挙は、有力視されていたクリントン候補を抑え、トランプ候補が勝利した。米国大統領は良い意味でも悪い意味でも世界に甚大な影響力を持っている。選挙結果に世界は注目した。政治経験がなく、暴言を吐くトランプ氏の勝利に戸惑ったというのが事実ではないか。民主党で、クリントン候補と争ったサンダース氏は選挙中のインタビューで、「私の考えでは、ドナルド・トランプがこの国にとって信じられないほどの大災害になることは非常に明白なので、私はトランプの敗北を見届けるために、できる限りのことをすべてやります」と語っていた。日本政府もトランプ氏の勝利に困惑している。

トランプ氏はメキシコとの国境に「壁」を作る、イスラム教徒を入国させない、不法移民を送り返すなどと人種差別的な発言をしていた。また、女性蔑視やセクハラのような言動があったと取り沙汰されていた。選挙後、反対派は「私の大統領ではない」と訴え、トランプ候補を支援した人々を「差別主義者」と言って、なじっている。

トランプ氏は「米国第一」と言っている。世界の警察官ではないから、米軍に守ってもらいたいならば、見合う軍事費を出せと言っている。また、米国人の雇用を守り、経済を上向かせるために、関税をかける保護主義を取ると言っている。TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）にも反対している。人種、性差別発言といい、新自由主義経済がグローバル化に乗って闊歩している時代に、逆行するアナクロニズムにも見える。

しかし、トランプ氏が勝利したことには、時代の悲鳴があるのではないか。新自由主義経済は、ある意味では経済を活性化させた。米国のレーガン元大統領、英国のサッチャー元首相、日本の小泉純一郎元首相の時代は経済的に活気があった。その時、富が貧しい者たちに滴り落ちるトリクルダウンを期待したが、「だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる（マタイ福音書25章29節）」という「マタイ効果」に陥り、貧富の格差が広がるばかりである。グローバル化は人、物、お金が自由に行き交い、世界を分かち合うという理念であった。グローバル化に支えられた新自由主義は米国で、ほんのわずか、巨万の富者を作り出したが、貧しい若者たちが戦争に駆り出され、プアホワイトは結婚もできず、将来に希望が持てない状況を生み出した。クリントン候補は、口では差別をなくそうと「愛と協調」を語るが、既得権益にまみれ、変革などできない。トランプ候補に期待をかけたというのが実態ではないか。「チェンジ」を合言葉にオバマ大統領が就任した時、変革が起こるのではないかと期待した。オバマ大統領は人権を重視する政策を打ち出したが、さほどの変革を見ることはなかった。既成権益を握る政治家、実業家を動かさなかったからである。トランプ氏は変革できるのか、そして、それはどんな変革なのか。

日本政府は、自由経済を促進するとTPP法案を衆議院で決議した。TPP法は農産物問題だけではなく、日本の経済機構を変え、日米同盟の強化策だとも言われている。米国議会はどう対処するのか。米軍は、プレゼンスに見合う軍事費を出さない国からは撤退するという。世界の警察官気取りで戦争を起し続けている米軍撤退は望むところである。日米安保を堅持したい日本政府はどう向き合うのか。軍事拡張を声高に主張していくのではないか。流動する世界になってくるだろう。